

尚絅大学「表現コミュニケーション演習Ⅰ：山本（3年生以上）授業実践報告

山本， 歩
尚絅大学現代文学部：助教

<https://hdl.handle.net/2324/4842516>

出版情報：オンライン授業の地平：2020年度の実践報告，pp.113-113，2021-04-30．雷音学術出版
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike International



1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本演習は日本近現代文学を専攻する学生を対象としており、研究方法(文学作品の読解、資料調査、ライティング等)の学修と、研究実践を行うものである。特に、次年度の卒業研究にあたって重要になる〈作品へのアプローチ〉を学ぶため、文学作品を精読し複数の切り口から考察していくことを中心に据えた。

4月、前期授業の開始延期が通達されたため、メールを介して事前課題を出した。その後、全学で Google Classroom を使用した遠隔授業が開始された。事前課題のフィードバックから始め、数回、作品・論文等の要約や問題提起を含めた課題提出型の遠隔授業を行った。Google Classroom を介して課題ファイルを提示し、主に Word ファイルの提出かメールへの記入で回答させた。6 月からは対面授業が開始されたが、一部の学生へ配慮し、対面と遠隔(映像・音声のリアルタイム配信)を同時に行うハイブリッド形式を実施した。最終的には、ハイブリッド形式を維持した状態で、学生による研究発表を行った。

当初想定していた〈1回につき1作品を扱い、ディスカッションを交えつつ精読していく〉という進行には修正を加え(ディスカッションを安定して行えない状況では、個々の課題を単調にこなすのみとなるおそれがあったため)、各課題の関連度を高めた。具体的には小平麻衣子『小説は、わかってくればおもしろい——文学研究の基本 15 講』(2019,慶應義塾大学出版会)を用い、同書の理解度を問うと共に、そこで得た知見を別の作品に応用していく形を取った(例えば志賀直哉『小僧の神様』を扱った後、同作者の『流行感冒』や、比較可能な芥川龍之介『葱』を扱う——等)。

ハイブリッド授業においては、完全遠隔時と同様、授業資料は Google Classroom にすべて事前公開した。遠隔受講生については、通信容量に配慮し、学生側の映像・音声を切らせ、応答はチャットで行わせた。遠隔受講生への発問については(苦肉の策ながら)あらかじめ傾向を示唆しておくことで、タイピングによるタイムラグを多少カバーできるようにした。

成績評価は各課題に対する回答を 10%、個人発表を 40%、期末レポートを 50%とした。当初から変更しなかったが、個人発表とその質疑応答に〈これまでの課題の経験が踏まえているか〉を評価の基準として新たに設定した。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

従来、長文を読んでいることが前提となる文学系専門科目は事前学修が必須であり、課題提出型の遠隔授業と相性は悪くない。むしろ、読む作業と、考え書く作業が自分のペースで接続可能なため、全体的に思慮深く、的確な指摘が見られた。だが、いわゆる〈あそびのない〉状態になりがちで、それがストレスとなった学生もいるようである。

ハイブリッド授業の運用は、発問や、受講生間のコミュニケーションの点など、課題が残る。しかし、こうした授業を実施できたのは、とりわけ地方大学としての本学の状況を考えれば、大きな収穫であった。本学は熊本県にあるが、2020 年前期はコロナ禍の他、豪雨災害(7 月)にも見舞われた。学生の中には被災、ないし交通網の障害により一時的に通学不可能になった者もいたが、その際もハイブリッド型の対応により、授業参加が可能になった。遠方から、限られた交通手段で通学する学生が多く、しばしば災害でそれに支障が生じる土地柄を考慮するとき、ハイブリッド対応の円滑化が今後も求められるのは間違いない。